



Title	中国語を表す言語名の諸相 : その多様性、淘汰と変質、用法差
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2018, 52, p. 67-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76091
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国語を表す言語名の諸相

——その多様性、淘汰と変質、用法差——

田野村 忠温

キーワード：中国語を表す言語名／「中文」／「漢語」／「中国話」／「華語」

1 はじめに

中国語——と日本語で呼ぶ言語——を表す中国語の名称は周知のごとく多様である。「中文」「漢語」「中国話」「華語」「国語」を始めとする多くの名称が広く通用している。

中国語の名称の多様性に正面から向き合った考察の事例を筆者は知らない。問題は非常に複雑で、この小論でそれを満足の行く程度に解明することは残念ながらできないが、より進んだ理解に至るための第一歩としていくつかの観点からの考察を試みる。

また、中国語を表す日本語の名称の問題も歴史的に見ると複雑である。これについても併せて検討を加える。

なお、ここでは日本語、中国語とも漢字は原則としてすべて現代日本の字体によって表記する。

2 予備的考察

中国語圏においては中国語の名称に関する議論は従来少なくない。しかし、一部の名称に考察の重点が置かれるのが通例であった。それは、多くの議論が、「華語」や「国語」の名称が現在最も勢力の強い正式な名称である「漢語」に対してどのような関係にあるのかといった疑問に根差していることに

よる。概説的な文脈でよく見られる、東南アジアの華人社会では「華語」が使われ、台湾では「国語」が使われるといった解説もそうした疑問を前提としている。

また、中国語を表すのにどの名称を使うのが望ましいのかという評価的な観点からの議論もある。そのような文脈においても当然多数の名称が対等のものとして扱われることはない。

ここで目指すのは、中国語の諸名称の過去および現在における使用状況と名称の性質に関するできるだけ包括的かつ公平な分析と記述である。

2.1 通時的な考察の必要性

中国語の名称の問題を考えるには、その歴史を確かめる作業を欠かすことができない。現在の名称の状況は過去のそれを背景とし、淘汰と変質の結果として存在しているからである。現代語における名称を見比べるだけでは、常識的に分かる範囲のことしか分からない。

ほかのあらゆる語と同じく、言語の名称は時間を通じて変化する。ある意味で、言語名は特に変化しやすい種類の語の1つだと言えるかも知れない。言語名はそもそも異なる言語の接触を通じて初めてその必要が生じるものである。例えば、日本語だけの世界に暮らしていれば日本語を表す名称は要らず、ただ地元のことばと異郷のことばなどを必要に応じて区別することができれば事足りる。言語名の発生は異国や異民族の言語との接触の産物、すなわち、言語の区別の意識の発現である。そのような言語名は、場合によっては安定までに時間を要し、社会状況を始めとする言語外的な諸要因の影響を受けて変化しやすいという性質を帯びることになる。

2.2 考察の対象とする名称の範囲

中国語にはそれを表す名称として、冒頭に挙げた「中文」「漢語」「中国話」「華語」「国語」のほかにも「普通話」があり、過去には「官話」という表現もあった。各地の方言を表す「北京話」「広東話」「上海話」、「^{えっ}粵語」「呉語」

「閩語」などもある。しかし、そうした名称はここでの考察の対象から外す。それらはいずれも中国語の内部における言語の種類を示すものであり、他言語、他国との対比に関わる言語名ではないからである。

「漢語」は、古くは漢王朝の時代の言語を指していたのが、その後漢民族の言語を表す名称になったものだと言う（鄭（1959）¹⁾）。そのいずれの意味においても、「漢語」もまた第一義的に他国の言語との区別を表すものではない。しかし、「漢語」は今や中国を代表する言語の名称として他言語と対比される存在にもなっているので、考察から除外することはできない。

なお、中国語を「漢語」と呼ぶことについては、“中国は多民族多言語の国家で、漢族の言語は多言語の1つに過ぎないから「中国語」ではなく「漢語」と呼ぶ”とする説明があり、日本の中国語の教科書にもよく書いてある。その説明は事実の重要な一面に触れてはいるが、「中文」や「中国話」の名称が通用している以上、実のところ満足な説明にはなっていない。さらに言えば、1956年2月に中華人民共和国国務院の発布した「關於推广普通話的指示（普通話普及に関する指示）」は少数民族地区における言語教育や放送での使用言語の統一についても述べており、本来漢族のものであった言語も漢族だけが使うものではない。したがって、それを中国における共通の言語という意味において「中国語」と呼ぶことも何ら不適切であるわけではない。実際、「中国語」という名称は過去の中国語では広く使われていた。

3 名称の構成と多様性

ここで扱う中国語の名称はすべて、言語や発話、文章を表す「語」「話」「文」などの普通名詞を主要素とし、それを限定する固有名詞その他を前置することによって構成された複合語である。

現在では「漢-語」「中-文」「中国-話」「華-語」「国-語」のように前後の要素の組合せが特定のものに限定されているが、19世紀から20世紀前半にかけての時期を中心とする過去の資料によって確かめてみると、前後要素の

組合せははるかに多様であったことが知られる。筆者が用例を確認することのできた組合せを表の形に整理すれば表1ようになる。「◎」は現在通用している組合せ、「○」は過去には用例があるがすでに廃れたか、現在では広く使われない組合せを示す。「国語」は日本語からの借用と見られる面があり（後述）、しかも、中国語に限定されない一般的な名称であるので表から省いている²⁾。

表1 中国語の名称における前後要素の組合せ

	-語	-話	-言	-文
漢-	◎	○	○	○
唐-	○	○	○	○
華-	◎		○	○
中国-	○	◎	○	○
中-				◎

現代における中国語の名称は表1に見る多様な組合せの多くが淘汰された後に残ったものと言える。「中文」「漢語」「中国話」「華語」「国語」のように複数の名称をただ列挙すれば名称の多さが目立つが、過去の状況に照らして見れば多くの名称が消えてむしろ整理、統一が進んだ状態が実現しているのである。それはおそらく、19世紀以後中国語を他の諸言語から区別して捉える機会が増え、当初は人ごとに多様な名称が使われたが、中国語への言及の機会が増え続ける中でおのずと表現の幅が収斂していったことであろう。

4 名称の変遷——淘汰と変質

表1に示したものを中心とする中国語の多様な名称のそれぞれがどの時期のどのような資料に見出されたかは稿末の中国語名称年表に示してある。ここでは、諸名称の変遷に関して、その全体的な動向を理解するうえで特に注

目に値すると思われるところを中心に述べる。

論述は複合語の主要素ごとに分けて行う。名称の性質は主要素によって決まっている部分が大きいと考えられるからである。

4.1 「～語」

あらゆる中国語の名称のうちで、「漢語」と「華語」は歴史が特に長い。まず「漢語」について言えば、『佩文韻府』の全文を確かめれば、古代の歴史書や詩文に「漢語」が現れることが知られる。また、相対的に新しいところでは、マテオ・リッチ（Matteo Ricci、中国名利瑪竇）の『坤輿万国全図』（1602（万暦30）年）の解説文中にも「漢語」は現れる。

しかし、19世紀の資料を調べて注意を引くのは、中国語を表す諸名称の用例中に「漢語」のそれが占める比率の低さである。「漢語」の出現はほぼもっぱら中国人による著述——例えば、梁廷楠撰『海国四説』（1846（道光26）年）や日刊紙『申報』（1872（同治11）年創刊）の記事——に限られている。当時中国と西洋との交渉が増す中で、西洋人宣教師あるいは時代が下ると中国人によって著された中国語や英語の辞書、入門書が多数出版されたが、一般に口語の習得に重点を置いたそれらの著作中には「漢語」の使用をほとんど見出すことができない。

筆者の気付いた唯一の例外は、ヴィルヘルム・ロプシャイト（Wilhelm Lobscheid、羅存徳）による『英華字典』（1866～1869（同治5～8）年）で、その‘Tongue’の項目に‘the Chinese tongue’の訳語として「唐話」とともに「漢語」が挙げられている。しかし、ロプシャイトにとって最も普通の中国語の呼び方は「唐話」であったと思しく、‘the Chinese language’を‘Chinese’の項目では「唐話」「中国話」「華言」と訳し、‘Language’の項目では「唐話」とだけ訳している。³⁾

以上の事実は、「語」を主要素とする「漢語」という名称は書面語的な性質が強く、日常的に使われる表現ではなかったことを意味しているものと考えられる。そして、それが現代に至って口頭語でも広く使われるようになった

たのは、本来書面語的、学術的な名称であったものが、その頻用化とともに性質を変えてきたということだと考えられる。そうした変化を推し進めたのは、新中国成立後における「漢語拼音^{ピンイン}」の制定と教育、「漢語」や「現代漢語」を冠した多数の中国語辞典の出版、そして、改革開放後の「対外漢語教学」、すなわち、外国人に対する中国語教育の振興などであろう。「漢語」の名称はピンインの教育や辞書の出版を通じて中国人民に広く浸透し、外国人に対する中国語教育を通じて国外でも認知されるに至った。

言語名の学術界、教育界から一般社会への拡散は、「漢語」という中国語の名称だけに認められるものではない。同じく「語」を主要素とする言語名である「英語」も、当初書面語的な表現であったが、英語の社会への普及に伴って大衆化していった（拙論(2018b)）。「漢語」と「英語」という言語名に生じた性質上の変化は筆者の見るところでは本質的に共通である。

「華語」の語史も「漢語」のそれに似ている。すなわち、古代から使用が見られるものの、19世紀から20世紀前半にかけての文献中には用例を多く見出すことができず、普及は20世紀後半以後の現象である。筆者が「華語」の用例を確認できた近代の資料は、『申報』のほか、イライジャ・コールマン・ブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman、裨治文) 撰『大美聯邦志略』下巻(1861(咸豊11)年)などの少数にとどまる。しかし、「華語」は「漢語」と異なり現代の普及が中国以外の地域で生じたということもあって、語史の確認がむずかしい。盧(1984)、田(1994)、郭(2004)、莊(2005)などによれば、「華語」は1950年代シンガポールやマレーシアの独立運動の時期に「華人」「華族」などの語とともに普及したと言うが、その正確な時期や過程の解明については今後の研究に待たなければならない。

現在の中国語では一般に使われない「中国語」の名称も『申報』に見られるが、これについてもさらに早い用例が“馬礼遜^(モリソン)”の作として伝わる『外国史略』に現れる。⁵⁾

琉球国在日本南。(中略) 居民形体与日本同。(中略) 尊貴者識漢字, 学

中国語。由福州入貢京都。(琉球国では、身分の高い人々は漢字を知り、中国語を学んでいる。福州を經由して朝貢する。)

(馬礼遜『外国史略』、1840年代後半)

ほかにも例えば、ベルンハルド・カールグレン (Bernhard Karlgren、高本漢) 著、張世祿訳『漢語詞類』(1937(民国26)年)は「漢語」とともに「中国語」を用い、王力『中国語文概論』(1939(民国28)年)は「中国語言」とともに「中国語」を用いている。ちなみに、後者はその後『中国語文講話』という書名による重版を経て、1955年にはさらに『漢語講話』と改題して出版されている。その「新版自序」では「漢語」への名称変更の理由が次のように説明されている。

最近一部分中学裏開始試教新設的漢語課，明年秋季起就要在全国推行，中学語文教師需要一些有関的参考書，於是它又從中国青年出版社轉到文化教育出版社來，名称也改為‘漢語講話’。

(王力『漢語講話』、1955年)

中学校の新設科目「漢語」を担当する教師の参考書として使えるよう書名を『漢語講話』に改めたと言う。もちろん本文でも「中国語」は「漢語」に書き換えられている。「漢語」という科目は言語と文学の教育を分離する考えに基づくもので、その目的と内容は1956年に中華人民共和国教育部が発表した「初級中学漢語教学大綱(草案)」に詳述されている。そのような科目が長く教えられていれば、それも「漢語」の名称の普及の大きな力になったであろうが、当の教育施策は張他編(1982)によれば2～3年で廃止された。

表1からは省いた「国語」という名称の、国家統一の象徴として制定、教育される言語を表す近現代的用法は日本語からの借用のようである。中国語の文脈において当該義の「国語」は最も早くは呉汝倫じょりん『重訂東游叢録』(1902(光緒28)年)に収められた伊沢修二との筆談の記録中に現れる(李

(2003))⁶⁾。そこにおいて、伊沢は呉に対して中国の言語統一が急務であると告げ、学校での「国語」教育の必要を述べている。伊沢は呉に薩摩の学生が「普通語研究会」を組織して「東京語」を学んだことも紹介している。

4.2 「～話」

「話」を主要素とする中国語の名称はいずれも歴史を通じて口語的性格を保持している。

筆者が19世紀中葉までの語学書中に見出すことのできた、中国語の名称を含む会話文例はすべて「～話」という形の名称を使っている。そして、例が多いのは「漢話」である。英語との対訳になっていない用例は簡略な日本語訳を添えて示す。

Can you talk English? 你会講英吉利話

No; I can talk Chinese. 不。我会講漢話

(Robert Morrison 『英吉利文話之凡例』、1823 (道光3) 年)

He speaks Chinese very well. 他講漢話甚好

(*The English and Chinese Student's Assistant*, 1826 (道光6) 年)

你会說漢話麼 can you speak Chinese?

漢話都不会說 I can't speak Chinese.

漢話難学 Chinese is difficult.⁷⁾

(Robert Thom 『華英通用雜話』上卷、1843 (道光23) 年)

尔^(会)曉講漢話^(不)唔呢 can you speak chinese?

漢話都唔曉講 i can't speak Chinese

漢話難学 chinese is difficult⁸⁾

(鄭仁山 『華英通語』、1849 (道光29) 年)

看貴国的人学我們的漢話都像^是費事得很，却是甚麼難處呢。(貴国の方は中国語を学ぶのに苦勞するようですが、どこがむずかしいのですか?)

難道我們這漢話和貴国的話，全是兩樣的麼。(中国語と貴国のことばはまっ

たく違うとも言うのですか?)

(Thomas Wade 『語言自邇集』、1867 (同治6) 年)

次は「唐話」と「中国話」を使った例である。最初の例の出典は西洋人のための広東語の入門書である。

I think of learning the Chinese language. 我想学唐話囉

Do you indeed? 你要学唐話啲

(Elijah Coleman Bridgman *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*,
1841 (道光21) 年)

Do you understand chinese. 你懂得中国話麼

(Stanislas Hernisz 『習漢英合話』、1854 (咸豊4) 年)

その後「漢話」と「唐話」は廃れて「中国話」だけが残ったわけであるが、その理由は不詳である。

「話」の口語性は先に触れた英語の名称の場合にも共通する。書面語的な「英語」が口語の領域に進出するまでは、一般に「英吉利話」「英国話」「英話」などの名称が使われていた(拙論(2018b))。

4.3 「～言」

「言」を主要素とする中国語の名称として用例を確認することができたのは、「漢言」「唐言」「華言」「中国言」の4語である。書面語的か口語的かという区別で言えば、「語」と「話」の中間に位置するのではないかとも想像されるが、いずれも用例が少なく、確かなことは言えない。

「漢言」「唐言」「華言」「中国言」はその後すべて廃れ、「言」で終わる中国語の名称は消滅した。

4.4 「～文」

「文」は、表1に見る通り、「漢」「唐」「華」「中国」「中」のすべてとの組合せにおいて言語名を構成している。そして、「中」は「文」との組合せにおいてのみ用いられる。

「中文」は現在最も使用頻度の高い中国語の名称であるが（後述）、その語史についてはよく分からないことが2つある。その第1は、「中文」が普及した時期と過程である。調査で確かめられた限りのことを述べれば次の通りである。まず、19世紀の辞書や語学書中には「中文」は見出せない。確認できた「中文」の初出例は1873（同治12）年3月24日の『申報』に掲載された「英京設教習中文書院」という短い記事で、ロンドンに中国語の学校が開設されたことを報じている。しかし、『申報』にも「中文」の用例は少ない。同紙の記事以外に確認できた最も早い用例は、雑誌『繡像小説』第23期——刊行年は不詳であるが、郭（2000）によれば1905（光緒31）年前後——に掲載された李宝嘉「新編小説 文明小史 第二十五回」におけるものである。ここでは一人の若者が母親から役に立たない「洋文」ではなく「中文」を学んで身を立てるよう諭される場面が描かれている。ただし、この「中文」は言語と言うより中国の文章であろう。このように、「中文」は20世紀初頭までの資料中には用例を見つけ出すことも容易ではない。さらに時代が下って1920年を過ぎるとようやく、『清華学校図書館中文書籍目録』（1927（民国16）年）や中文^(ラテン)拉丁化研究会編『中国話^(表記法)写法拉丁化』（1935（民国24）年）のように事例を見出しやすくなる。しかし、ピンインの制定と教育を主題として1956年に発刊された雑誌『拼音』——翌年『文字改革』に改称——でも「中文」の名称はほとんど使われていない。⁹⁾

第2の疑問は、「中文」の指示対象が文字言語から音声言語にまで広がったとすれば、その拡張は何によってもたらされたのかということである。上記の小説の用例や書籍目録の書名などにおいても、「中文」の意味は文字言語の次元にとどまっている。もし「文」が本来文字、文章の意味であったと

すれば、なぜ「説中文(中国語を話す)」のような表現が広く行われるようになったのか。文字言語から音声言語への修辭的な轉換が可能であること自体はいぶかしむに足りないが、音声言語を表す「話」などの表現があるのに、それをなぜ「文」で代用するようになったのかということである。それとも、外国語の学習においては文字言語と音声言語を同時に学ぶことが多いことを思えば、「説中文」のような言い回しは単に記録を見出せていないだけで、実は早くから行われていたのか。

以上のような疑問を解決し、「中文」の語史を適切に把握するには、まず過去におけるその使用状況を正確に跡付けることが必要である。

5 名称のコロケーション——用法差

中国語の諸名称はそれぞれに異なる用法上の特徴を有している。日本の中国語教科書には、“話しことばでは中国語を「中文」とも呼ぶ”と説明しているものがあるが、「中文」を口語的と特徴付けることはおそらくできず、いずれにせよ文体的な要素は名称間の用法差の一面に過ぎない。

名称の用法差の本格的な解明は容易な課題ではないが、ここではコロケーションの観点からの——すなわち、名称が慣習的にどのような語とよく共起するかに着目することによる——2、3の試行的な分析について述べる。いずれの分析も特定の資料に依存しており、中国語全体にそのまま通用する結論が得られるわけではない。¹⁰⁾

5.1 後続する名詞

まず、中国語の各名称の直後にどのような名詞がよく続くかを確かめてみる。「Google Books Ngram Viewer」(<https://books.google.com/ngrams/>)——以後、「Ngram Viewer」と略記する——を使い、現代の中国語で「中文」「漢語」「中国話」「華語」によく続く名詞を確かめてみると、表2のような結果が得られる。¹¹⁾

表2 中国語の名称によく後続する名詞

名称	よく後続する名詞
中文	版, 図書, 情報, 本, 報紙(新聞), 字, 書, 出版
漢語	教学(教育), 語法, 詞匯(語彙), 詞典(辞典), 研究, 學習, 拼音(ピンイン), 語言学(言語学)
中国話	なし
華語	電影(映画), 文学, 廣播(放送), 教学, 運動, 電視(テレビ), 学校, 節目(番組)

名称ごとに共起語が大きく異なっていることが印象的である。共通しているのは実に「漢語」と「華語」に後続する「教学」だけである。

表2に見る共起語の限りでは、「中文」は中国語以外の言語の文章や情報との対比を意識した名称であると言える。すなわち、他言語で書かれた同内容ないし同種の文章その他の存在を前提として——あるいは意識して——、当の出版物が中国語で書かれていることなどを表している。「漢語」においては他言語との対比の意識は相対的に薄い。「漢語」について注目すべきは、共起語がいずれも中国語の研究や教育に関わっていることである。「漢語」はそうした領域で好んで使われる、専門色の濃い名称だと言える。「華語」については、中国外の社会における中国語による言語活動やその産物などを表すのによく使われているらしいことが確かめられる。

「中国話」についてはNgram Viewerで確認できる高頻度の共起名詞はない。これは「中国話」が他の名称と異なり3字語であることが一因である可能性があるが、それだけでは十分な説明にならない。同じく3字語である「普通話」については「工作(仕事)」や「水平測試(水準テスト)」の後続を確かめることができるからである。¹²⁾結局、「中国話」は“中国語を話す”などの単純なことを言うのに使うことが多く、他の名称のように複合的な概念を構成するのに使うことをあまりしないということであろう。

5.2 先行する動詞

次に、中国語の各名称の直前に現れる動詞について確かめてみる。高頻度で共起する動詞はその種類が多い関係でNgram Viewerでは満足に調べることができないので、ここではGoogleのサーチエンジンを利用する。

「中文」「漢語」「中国話」「華語」と、それらの直前に特によく現れる動詞「説(話す)」「講(話す)」「使用」「用」「会(できる)」「懂(分かる)」「学習」「学」との組合せのそれぞれをGoogleで検索したときのヒット件数——当該の句を含むWebページの数——を表3に示す。検索語句は簡体字によって指定した。¹³⁾

表3 「動詞+言語名」のGoogle検索ヒット件数

	中文	漢語	中国話	華語
説	4,170,000	565,000	455,000	191,000
講	1,710,000	199,000	103,000	194,000
使用	1,910,000	321,000	73	94,000
用	6,460,000	6,590,000	117,000	104,000
会	1,050,000	160,000	55,400	73,400
懂	1,600,000	271,000	79,300	34,600
学習	1,350,000	1,150,000	66,600	80,800
学	3,150,000	1,430,000	56,000	95
計	21,400,000	10,686,000	932,373	771,895

名称ごとのヒット件数の大小と各動詞の比率が視覚的に分かるよう図示すると図1のようになる。グラフの背景色の有無は動詞の大まかな意味区分に基づいて設定してある。図中の用例数の少ない部分が判別できないという問題にはすぐ後に対処する。

まず注意を引くのが名称間の総ヒット件数の大きな差である。すなわち、「中文」が2,000万件超で最多であるのに対し、「漢語」はその半分、「中国話」と「華語」はさらにその約10分の1である。また、「中文」と「漢語」においては「用」の比率が抜き目出て高い。これは、多くの場合、文の主たる述

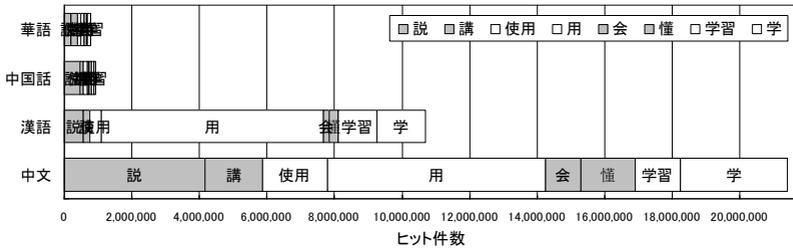


図1 各名称のヒット件数と内訳

語ではなく、「用中文出版（中国語を用いて出版する）」「用漢語授課（中国語を用いて授業をする）」のように手段を表す句中における使用である。日本語で「中国語で」と言うときの後置詞「で」に相当する。

「説」または「講」との組合せ、すなわち、「中国語を話す」という文脈においては「中文」の使用が圧倒的に多いことも目を引く。そして、「中国話」の総ヒット件数は「漢語」のその約10分の1に過ぎないにもかかわらず、「説」との組合せのヒット件数は両者においてほぼ同等であることも分かる。これは「中国話」は「説」の目的語として使われる比率が高く、「漢語」はそれが低いことによるが、¹⁴⁾そうしたことを確認しやすいよう名称ごとの動詞の内訳を百分率の形にして図1を描き直すと図2のようになる。

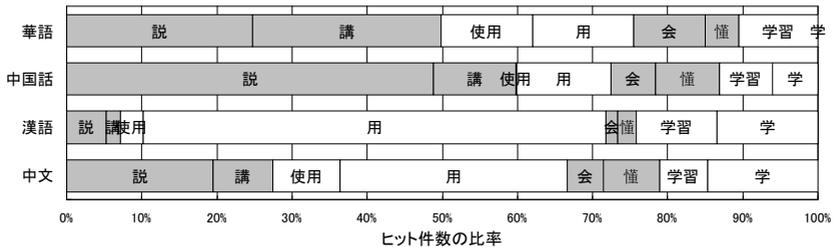


図2 動詞内訳の百分率による表示

「華語」の場合に「説」と「講」のヒット件数がほぼ同等で、他の名称の

場合に比べて「講」の使用が多いのは広東語などの方言の影響によるものであろう。¹⁵⁾

北京語言大学の「BCC 漢語語料庫」(<http://bcc.blcu.edu.cn/>)の「報刊(新聞・雑誌)」データでも同様の分析を行ってみたところ、用例の件数はGoogleのヒット件数のわずか8万分の1程度であったが、全体的にはGoogleによる調査におおむね似た結果が得られた。ただし、それぞれの名称に先行する動詞の比率にはさまざまに異なる要素もあった。

過去の中国語における状況はどうかであろうか。それを確かめるために『申報』の検索サイト「申報数拠庫(データベース)」(<http://www.sbsjk.com/>)で刊行期間全体(1872～1949(同治11～民国38)年)における用例数を調べてみたところ、表4の通りであった。¹⁶⁾

表4 「動詞+言語名」の『申報』用例数

	説	講	用	操	能	通	懂	語	学習	学	計
中国話	82	32	19	3	0	0	18	0	5	8	167
漢語	5	3	8	27	13	35	5	9	3	1	109
中国語	7	3	21	20	2	2	3	4	6	3	71
華語	1	0	0	2	4	9	0	4	1	3	24
華言	0	0	1	5	2	6	0	1	3	4	22

用例数はBCCの場合の約3分の1とかなり少ない。本来新聞という媒体の特性——各記事の書かれた時期が正確に分かる——を生かして用法の通時的な変遷も確かめたいところであるが、これだけの用例数では信頼に足る分析は望めない。

表4の統計を視覚化すれば図3のようになる。

異なる種類の資料における統計どうしを単純に比較することはできないが、それでもGoogle検索によって確かめた現代語の状況とは様子が大きく異なっていることを容易に見て取ることができる。用例が最も多いのは「中国話」であり、「中文」はそもそも図に示せるだけの数の用例がない一方、「中国語」は多く使われている。また、名称に先行する動詞について言えば、現

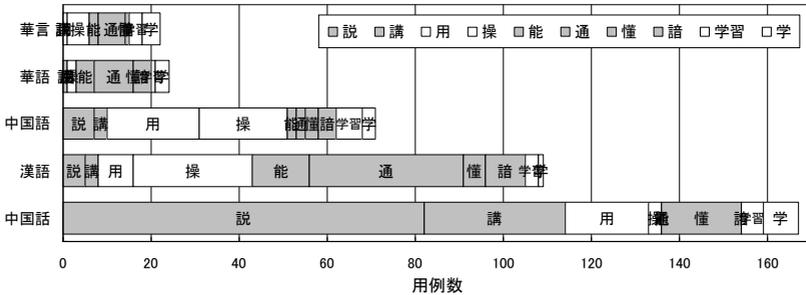


図3 『申報』における各名称の用例数と内訳

代では用例の少ない「操（使う）」「通（通じている）」「諳（通じている）」があり、現代では多い「会」の使用は少ない。ほかにも、図2と図3を比較すれば、「漢語」と「中国語」のいずれにおいてもよく共起する動詞の傾向に相当の違いがあることが分かる。例えば、図2では「漢語」に先行する動詞中に「学習」と「学」が合わせて約25%の比率を占めていたが、図3ではわずか4%弱にとどまる。

6 中国語を表す日本語の名称

最後に、中国語の日本語における名称の歴史を確かめる。ここでは各時代における同時代的な中国の言語を考察の中心とし、古典的な漢文は考慮の外に置く。

6.1 「～ことば」——「^{から}唐ことば」「支那ことば」

日本語の歴史を通じて長く使われた中国語の口語的な名称はおそらく和語の「唐ことば」であろう。語性の点で、中国語の「話」を伴う名称に共通するものと思われる。「唐ことば」のほかにも、「からことば」「唐言葉」「唐詞」「唐言」などの表記があった。また、「からこと」という語形もあった。『日本国語大辞典』第2版（小学館、2000～2002年）によれば「唐ことば」は

中国語だけでなく朝鮮語その他の外国語も表したとのことであるが、確認できた用例の限りでは中国語を指すものが支配的である。

19世紀終盤以前の日本語の資料中に中国語の名称を見出すことは思いのほかむずかしいのであるが、「唐ことば」の用例だけは比較的容易に見出すことができる。そのいくつかを挙げれば次の通りである。一語化していない「唐のことば」という表現の用例も併せて挙げる。

唐ノ方書ヲ見尽シ、日本人ノ療治ニハ、大キニ心得アルト云コトヲ知テ、唐ノ方書ニモタレズ、日本人ニ合ヤウニ方ヲ立テ療治シ、チンプンカン
プンライハヌヘ、文盲ニナツタ也。然レドモ博学ナルカラコトバノ御
医者ヨリ、病ライヤスハ、トツト上手デゴザル。

(まなせどうさん すいちくあん
曲直瀬道三『雖知苦庵養生物語』、16世紀)¹⁷⁾

あれは知れぬ筈でござる。唐言葉をいはつしやるのでござる。わしはも
と入唐したゆゑ、唐音は知つて居ますが、御内儀には分るまい。

(じょこう じゅらい ちよのはじめおんどのせと
瀬川如阜・宝田寿来『千代始音頭瀬渡』、1785(天明5)年)¹⁸⁾

通辞唐言葉にて出る。

通辞唐ことばにて其通り云。

(大蔵虎寛本狂言台本「唐相撲」、1792(寛政4)年)¹⁹⁾

Able to speak the Chinese language

Yoku Kara no kotoba wo yuu.

Kara no kotoba wo yoku mooshimas.

(John Liggins *Familiar Phrases in English and Romanized Japanese*,

1860(万延1)年)

からことば など、すべてよそぐにのことばを、わがわがことばと
するにわ、そのことばのすえに、「する」ということばをつ
けて、はたらかせることになつてをる。

(石川倉次『はなしことばのきそく』、1901(明治34)年)

ここで注意すべきは、こうした「唐ことば」の用例には意味に関して2種類のものがあるということである。すなわち、「唐ことば」が中国語という言葉を指していると言える場合と、中国語の語句を指している場合があるということである。「唐言葉をいはつしやるのでござる。御内儀には分るまい。」の「唐言葉」や、“Able to speak the Chinese language”の対訳として示された「よく唐のことばを言う」の「唐のことば」は中国語という言葉である。しかし、「博学ナルカラコトバノ御医者」というのはおそらく中国語で話す医者ではなく、日本語による発話に中国語の用語や表現をちりばめて話す医者のことであろうし、唐ことばを日本語の動詞とするには「する」を加えると説明するときの「唐ことば」は確実に中国語由来の語、つまり、日本語で言う漢語を指している。

このように「唐ことば」の現れの中には中国語という言葉ではなく、中国語の語句を指しているものがあるわけである。しかし、だからと言って、そうしたものは言語名の考察から除外する必要があるということにはならない。言語名の2通りの使用は無自覚的に行われており、両者は融通無碍の関係にあると考えられるからである（拙論（2018b））。このことは、「唐ことば」以外の中国語の名称にも共通する。用法の二重性を持たず、言語名としては使われない現代日本語の「漢語」は例外的である。

「唐ことば」は20世紀に入ると一般的な表現としては使われなくなり、歴史的な文脈などでのみ使われる特殊語と化した。また、それに取って代わるような形で20世紀前半には「支那ことば」という名称が広く使われた。「支那ことば」の口語的な性格は次の辞書の記述からも確かめられる。

【シナ-ことば】（支那語）（名）支那の国語。

支那語（シナゴ） 中国語（チウゴクゴ） 唐話（タウワ） 華言（クワゲン）
華語（クワゴ） 華話（クワワ）

（松平円次郎『俗語辞海』、1909（明治42）年）

この辞書は巻頭の凡例によれば「今、世の中一般に行はれて居る俗語の意義を解きあかし、併せて文を作る時に必要な言葉を、俗語で引いて、其れに適当な和漢の文語を求められるやうに編纂したもの」である。見出し語の「支那ことば」が俗語であり、他方、「支那語（シナゴ）」以下の語群がそれに相当する、文章に適した表現であることになる。

6.2 漢語の名称——「唐音」「清語」「華語」「支那語」「中国語」ほか

「唐ことば」と「支那ことば」以外の名称はすべて漢語、すなわち、字音を主要部とする複合語である。漢文、中国語文を除く日本の資料中に用例を確かめられた主なものには以下のものがある。名称の排列は主要部、次いで前部要素の五十音順による。

～音：唐音

～語：華語、漢語、支那語、清語、清国語、中国語、満語、満洲語

～文：漢文

～話：漢話、唐話

漢語による名称は元来、書面語的な名称として、口語的な「唐ことば」「支那ことば」と用途を異にしていたと考えられる。しかし、「唐ことば」「支那ことば」の衰退、消滅とともに、口語の領域でも漢語による名称を使うことになった。あるいは逆に、漢語の名称が普及して口語に進出した結果として「唐ことば」などが使われなくなったということかも知れない。いずれにせよ、和語系の名称と漢語系の名称とのあいだに役割の分担があった状態から、あらゆる場合に漢語系の名称を使って表現する状態に変わったことになる。

18世紀から19世紀中葉にかけて「唐ことば」と並んで広く通用した中国語の名称は「唐音」であったと見られる。用例が多く、中には口語的な文脈での出現もある。『日本国語大辞典』第2版の記述によれば、トウイン、トウオンという両様の読みがあったと言う。しかし、漢字だけで記された用例

では読みを確かめられず、調査で確認できた読みはトウインだけであった。

「唐音」の用例を次にいくつか示す。『和唐珍解』と『長崎土産』における「唐音」の出現は中村（1914）を通じて知った。

サンハイと申候は、上海と申唐音にて御座候由、唐人共申之候。

（『通航一覽』巻之二百二十九 陸奥漂民口書き、1762（宝暦12）年）²⁰⁾
 なんだか唐音と申物はむづかし(ママ)そうな物で御ざります。【=眼前で交わされた中国語による挨拶を聞いた人物の発言（引用者注）】

（唐来参和『和唐珍解』、1785（天明5）年）

王、下官をさして唐音にて言付る。

（大蔵虎寛本狂言台本「唐相撲」、1792（寛政4）年）

此ハンシヤウと申所の儀、唐人共え相尋候之処、杭州ハンチウの儀に御座候、是亦唐音を間違候儀と存候旨申候。

（『通航一覽』巻之二百三十六 松前漂民口書き、1797（寛政9）年）
 四五歳の稚児も相糺りまじ、彼国の衣服を着け帽子を着、華音たういんの歌をうたひ、
ラアハ チヤンメラ喇叭、哨呐、太鼓、笛を以て拍子を為す（後略）

（磯野信春『長崎土産』、1847（弘化4）年）

爰ニテシテ【=帰国を望む日本人力士（引用者注）】唐イン有てから、
(通 辭)ツウジ王の前に座し、日本人帰国の心持唐音(ママ)つかう。

（山協和泉『和泉流狂言大成』第一巻「唐人相撲」、1916（大正5）年）

用例のうち、幕末に編纂された外交史料集である『通航一覽』から引用した2件は、日本に帰国した漂民に対する尋問の記録の一部である。いずれも漂民が供述時に口にした中国の地名に関する注記であり、その内容は中国人に当の地名を尋ねて得た回答である。“サンハイというのは上海という唐音だ”、“ハンショウは杭州ハンチウのことで、唐音を誤ったのだと思う”ということであるから、「唐音」は中国語ないし中国語の語句を表していると言える。

今ではほとんど知られていないであろう「漢語」「清語」「清国語」「満洲語」

「満語」「漢話」「漢文」の各名称について説明を加えれば以下の通りである。

「漢語」は今の日本語ではもっぱら語種を表す用語であるが、過去の資料中には中国語の名称としての用例が見られる。

聞ク駐清公使館ニ少壯ノ人数輩アリテ彼国ノ読法及官話ヲ学習セリト。

又文部省語学校ニハ現ニ漢語ノ一科ヲ設ケタリ。

(重野安^{やすつぐ}「漢学宜ク正則一科ヲ設ケ少年秀才ヲ選ミ清国ニ留学セシムベキ論説」『東京学士会院雑誌』第1編第4冊、1879(明治12)年)

Chinese, a. or n. 支那ノ, 清国ノ; 支那人, 唐人. *The Chinese language*, 漢語. (市川義夫纂訳『英和和英字彙大全』、1885(明治18)年)

カク其ノ国ニヨリ互ニ相等シカラザル言語アルヲ其ノ国ノ「クニコトバ」スナハチ国語トイフ。略シテ日本語 我ガ国ノ言語ナレバ日本トイフヲ省キテ単ニ国語トモイフ。支那語 漢語トモイフ。英語露語ナドイフハ是ナリ。

(岡沢鉦次郎『初等日本文典』前編上、1900(明治33)年)

「清語」は『日本国語大辞典』第2版には収録されていないが、明治期には広く使われていた。「清国語」という名称もあった。当時の新聞記事中に多数の使用が見出され、『清語教科書』『清語会話案内』『清語読本』『清語文典』あるいは『清国語速成』といった書名を持つ中国語教科書が少なからず出版されている。中国の文献における「清語」は満州語を指しているが、日本語の「清語」は中国語を表す名称である。²¹⁾

「清語」の読みは現代人にとっては迷う余地なくシンゴであるが、稿末の年表に見る通りセイゴという読みを示した事例もある。「清」という王朝名をセイと読んだ過去の文献は珍しくない。例えば、^{みねた ふうこう}嶺田楓江撰『海外新話』(1849(嘉永2)年)や仮名垣魯文『現今支那事情』巻之下(1875(明治8)年)は「清国」や「清人」にセイコク、セイジンという読みを与えている。したがって、読みの示されていない「清語」「清国語」の用例については書き手の意図がセイゴとシンゴ、セイコクゴとシンコクゴのいずれであったのかは

知りようがない。²²⁾

紛らわしいことに、中国語が「満洲語」と呼ばれることもあった。主として満洲事変（1931（昭和6）年）以後の慣用であるが、『満洲語会話1ヶ月卒業』（著者不明、1904（明治37）年）のように早い時期の事例も見られる。「満語」という短縮形もあった。いずれも『日本国語大辞典』第2版には記述がないが、用例は少なくない。吉野美弥雄『満洲語基礎』（1935（昭和10）年）の序文によれば、吉野は当時大阪中央放送局（NHK大阪放送局の前身）の放送で「満洲語講座」と題した中国語講座を担当していた。広崎潔編『満洲放送年鑑』（1940（昭和15）年）は、「満洲語講座」が好評を博し、「満洲ラヂオ」の「教養放送中の王座を占めてゐる」と述べている。

「漢話」という名称の用例は少ない。中国と関わりを持つ日本人による、中国語の知識に基づく名称であったと見られる。

商業学校でも支那言葉を稽古させますけれども漢話だけのことで、成程北部へ行つては漢話は通じますが、其通訳の出来る人が上海へ来たらまるで我々も同様何んにも通じはしませぬ。

（益田孝「東洋貿易談」『東邦協会々報』第24号、1896（明治29年）年）
即時之ニ決定シ、雇入レノ支那教師王治本等ヲ引連レ同社ニ投ジ、引続キ漢学漢話ノ教授ニ任ジマシタ。

（広部精編『増訂亜細亜言語集』、1902（明治35）年）

最後に「漢文」は、T. P. クロフォード（Tarleton Perry Crawford、高第丕）と張儒珍の共著による文法書『文学書官話（Mandarin Grammar）』（1869（同治8）年）に大槻文彦が注釈を施した『支那文典』の例言に現れるのを確認できただけである。その5例のうち3例を次に示す。

此書、原本アリ。（中略）即チ支那官話ノ文法書ニシテ、高雅ノ正文ニアラズト雖モ、其文法ニ於イテハ、正文ト大異アルコト無ク、且其字、音、

話、句ノ用法ヲ論ズルコト、推究分解シテ、詳悉遺サズ、深く文法ヲ説クノ真旨ヲ得テ、最モ漢文初学ノ人ニ裨益アリ。因リテ、今、行文ニ旁訓ヲ付シ、毎節更ニ注解ヲ下シ、以テ初学ニ便ニス。

原書、或ハ洋人ノ漢文ヲ学ブ者ノ為メニ著ハシ、モノナラム。

洋文ノ法ヲ以テ、漢文ノ法ヲ説キタルガ故ニ、毎章、洋文法ノ訳語ノ名詞、動詞等、其当ツベキ者ハコレヲ当テタリ。

(高第丕・張儒珍著、大槻文彦解『支那文典』、1877(明治10)年)

中国語を表す漢語の名称の使い分けが時代とともにどのように変化したかを正確に跡付けることはむずかしい。試みに、「国立国会図書館デジタルコレクション」(<http://dl.ndl.go.jp/>)に収められた、書名に中国語の名称を含む書籍の件数の推移を10年単位で確かめてみた結果を図4に示す。ただし、書籍の件数の少ない名称と、語種の名称としても使われる「漢語」は省いた。また、「日清語」「日華語」という複合的な言語名の事例は集計から除外している。

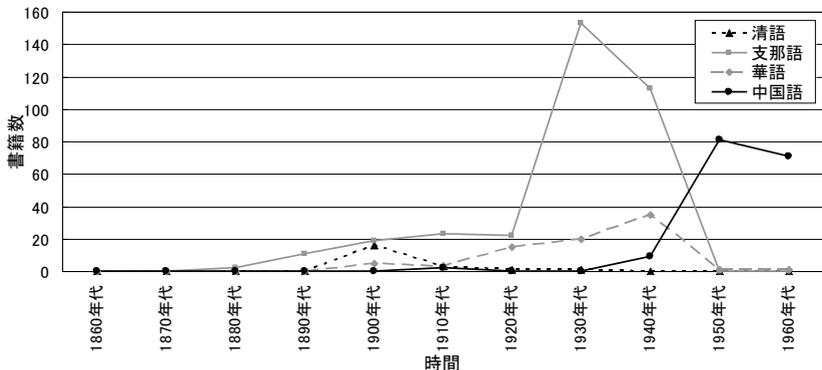


図4 書名に中国語の名称を含む書籍の件数の時間変化

一見して分かる通り、当該の期間全体における書籍の総件数は「支那語」、

次いで「中国語」が多く、「清語」と「華語」は相対的に少ない。また、4つの名称を使用のピークの時期の順に並べれば「清語」「支那語」「華語」「中国語」となる。

「清語」は1900年代（1900～1909年）の期間にピークがあり、その前後には書名に「清語」を含む書籍はわずかしかない。この短命の特性は、その直前の日清戦争（1894～1895年）と直後の清王朝の滅亡（1912年）に関係しているものと考えられる。すなわち、戦争の報道において「清国」の語が頻繁に使われ、そのことが語学書の書名にも影響を及ぼしたが、間もなく辛亥革命によって清国が消滅して「清語」の名称が現実にそぐわなくなったということである。当時の『文部省年報』における東京外国語学校の記述を確かめると、1912（明治45）年度までは「清語」が使われていたのが、1913（大正2）年度から「支那語」に変わっている。

「支那語」と「華語」については、それらを書名に含む書籍はともに20世紀の前半を通じて出版されている。しかし、両者の書籍件数の推移の様子は一致しない。すなわち、書名における「支那語」は19世紀終盤以後徐々に増えて1930年代に急増し、1940年代には減少に転じている。これに対し、「華語」は20世紀に入ってから1940年代まで単調に増加を続けている。両者の違いは、1930（昭和5）年10月の「支那国号ノ呼称」に関する閣議決定——一切の公文書で「支那」や「支那共和国」の使用をやめ、「中華民国」を使うことを定めた——²³⁾の影響が若干の時間差を伴って出版物の名称にも現れたということかと推定される。

1950年代以後は、それまでは書名に使われることのあまりなかった「中国語」がもっぱら使われるようになった。その背景に、「支那」の国名の使用をめぐる1946（昭和21）年6月の外務次官通達「支那の呼称を避けることに関する件」——一般の文書も含めて、特に必要のある場合を除き「支那」の使用を避けることを求めた——があったことは確実であろう。ただし、その観点だけで十分に説明が付くわけではない。同通達は「支那」の使用を控えるよう求めているに過ぎず、それ以外の名称は問題ないとしている——し

たがって、「華語」をやめる必要はなかった——からである。しかし、同年10月には日本中国語学会の前身である中国語学研究会が設立され、また、『文部省年報』によって確かめ得るように、大学や外事専門学校¹の学科の名称においても「支那」から「中国」への改称が順次進んだ。おそらくそうした動向が「中国語」の普及を推進したのであろう。

なお、図4で「中国語」のグラフ線が1950年代から1960年代にかけて下がっている。これは中国語関係の書籍の出版が減ったということではなく、単に新しい書籍にはまだデジタルコレクションに収められていないものが多いということではないかと思われる。

6.3 「中国語」の語史

上で見た通り、日本語における「中国語」という言語名の普及は20世紀中葉以後の現象である。実際、上述の1930（昭和5）年の閣議決定以前の時期の日本語資料中に「中国語」の用例はなかなか見出せない。

『日本国語大辞典』第2版の挙げる「中国語」の最も早い用例は1903（明治36）年に出版された上田万年『国語のため 第二』におけるものである。

而して通商の第一管鑰^(かんやく)は言語なることを忘るべからず。而して其の言語とは単に支那人の話す中国語^(かんご)のみにあらずして、英語なり仏語なり独逸語なり露西亞語なり凡て此等予輩の商敵たる国々の国語を指すものたるを忘るべからず。（上田万年『国語のため 第二』、1903（明治36）年）

先に引用した松平円次郎『俗語辞海』（1909（明治42）年）の「支那ことば」の項目にも「中国語」は現れるので（6.1）、20世紀初頭にすでにそれなりに普及していたのであろうが、確かめられる用例はわずかである。

しかし、「中国語」という名称の日本語における歴史ははるかに長い可能性がある。次に見る通り、9世紀の日本で書かれた資料にすでに「中国語」は現れるからである。

桓武天皇延暦十八年七月、有一人乘小船漂着参河国。(中略)年可廿、身長五尺五分、耳長三寸余。言語不通、不知何国人。大唐人等見之(みな)僉曰、(コンロン)崑崙人。後頗習中国語、自謂天竺人。常彈一弦琴、歌声哀楚。(延暦18(899)年7月に、小舟に乗って三河の国に漂着した1人の者があった。言語が通じず、どこの国の者が分からなかったが、中国人は皆コンロン人だと言った。後にその者は中国語を覚え、自分はインド人だと言った。)

(菅原道真編『類聚国史』巻第百九十九 殊俗部、892(寛平4)年)²⁴⁾

もっとも、古い時代の資料中に確認できた唯一の用例であることに加えて、漢文における出現であるなどの問題もあり、この用例に基づいて言い得ることは限られる。

ともあれ、筆者は『類聚国史』と上田万年とのあいだに「中国語」の用例を見出せていない。「中国語」の長期的な歴史も今後の解明に待つこととせざるを得ない。

7 おわりに

中国語を表す中日両語の名称の過去と現在を一通り浅く探ってみた。

考察の対象とした名称は一見“単なる名前”、すなわち特に意味を持たない固有名詞のようで、実はそうではない。それは、いずれの名称も中国語では「語」「話」「言」「文」、日本語では「語」「ことば」などの普通名詞を核とする表現であることによる。すなわち、それらの普通名詞の意味に応じて名称ごとに異なる用法上の特性があるということである。もっとも、その観点から名称の特性を単純に説明しきれぬわけでもなければ、名称の特性や選好傾向が時代を通じて一定しているわけでもなく、そうした事情が問題を複雑にしている。

ここで述べた調査と考察がさまざまな不足を含むことはあらためて断るまでもない。さらなる解明の余地を多く残した中国語の名称の問題に関する理

解が今後の研究によって深められることを期待したい。

[注]

- 1) 『漢語大詞典』(漢語大詞典出版社、1986～1994年)も「漢語」の項目に「漢朝人の文字語言」と「漢族的語言」という2つの語義を記述している。
- 2) ほかに用例が各1件しか見つからなかった「中華～」および「～字」の形の名称も省いた。
- 3) ロブシャイトは中国人を表す‘Chinese’については「唐人、漢人、中国人、華人」の順に訳語を挙げている。‘the empire of China’は「中国、中華、華夏、諸夏、震旦」と訳されている。
- 4) 「華語」の名称は近代の日本では広く使われており(後述)、同時期の中国語における状況と対比を成している。そして、近代の中国語における「華語」の用例の一部は日本事情の報告におけるものである。
- 5) 『外国史略』の成書時期および著者については鄒(2008)を参照。
- 6) 『東游叢録』には少なくとも2つの版があり、1902(明治35)年に三省堂書店によって出版された日本版には当該の筆談は収められていない。「国語」の出現は同年に上海の文明書局から出版された重訂版によって確認した。
- 7) 拙論(2018a)では別の議論の文脈においてこの文例3件のうち最初の2件を引用したが、そこでは「漢話」を「漢語」と書き誤った。
- 8) これらの文例はRobert Thom『華英通用雑話』の文例を使い、中国語文を広東語に置き換えたものである(拙論(2018a))。
- 9) 筆者が同誌中に偶然見出すことのできた「中文」を含む2件の記事は、『申報』における初出記事がそうであったように、いずれも外国人の中国語学習に関わっている。『文字改革』1959年第22期所載の「他們從小努力學中文(彼らは年少時より中国語の学習に努める)」という記事は中国語を教えるロシアの小学校を紹介するものであり、同1960年第4期所載の「国外人士對漢語拼音方案的反映(漢語ピンイン草案に対する国外の反応)」は中国の英文広報誌『中国建設』の連載コラム「中文月課」——原題はおそらく英語であろうが、記事ではそう訳されている——がピンインによる表記を併用して読者に歓迎されていることを述べている。
- 10) 本小論脱稿後に、郭(2004)と黄(2005)にも中国語の名称のコロケーションに関する記述があることに気付いた。併せて参照されたい。ただし、郭の関心はもっぱら「華語」と「漢語」の違いにあり、また、黄の考察は多様な名称を対象としているが、20世紀後半の『人民日報』に基づく調査であり、いずれもこの小論とは目指すところが異なる。

- 11) Ngram Viewerの概要と用法については同サイトの解説を参照。ここでの調査には「ワイルドカード検索」の機能を用いた。調査対象期間は1980年以後とし、一部の共起語は追加の検索によって補った。

「中文」によく後続する名詞にはほかに「系」と「大学」があるが、それらと組み合わせられる「中文」は言語名ではないのでリストから省いた。「中文系」は日本の大学の「中国語中国文学科」に相当する。「中文」と「大学」の組合せはもっぱら「香港中文大学」という大学名におけるものである。

- 12) 「普通話工作」の用例はその大半が「推广普通話工作(普通話普及事業)」などの表現の短縮として理解できるものである。
- 13) 検索には「フレーズ検索」の機能を使った。「説漢語」のように検索語句を半角二重引用符で囲んで検索することにより、ほぼ「説」と「漢語」の連続したテキストだけを採ることができる。ヒット件数は実際には「約～件」という形で表示される。

Googleに限らず、一般にサーチエンジンの表示する検索ヒット件数には時間変動などの問題がある(拙論(2008))。また、例えば「学漢語」のヒット件数には「学漢語拼音」という表現を含むページも数えられているといった問題もある。したがって、本文に示したヒット件数の記録もそのような問題に起因する不正確さを含むものとして受け止める必要がある。なお、検索は2018年8月19日に行った。

- 14) “話しことばでは「漢語」の代わりに「中文」とも言う”とする説明について言えば、事実はむしろ、日常的な文脈においては「中文」が一般的で、専門用語的な響きを伴う「漢語」は使用頻度が低いということではないかと思われる。
- 15) 「広東話」について調べてみても、「華語」の場合と同じく「説」と「講」がほぼ同率である。「普通話」では「説」と「講」の比率がほぼ3対1で、「漢語」の場合の比率に一致する。
- 16) 検索結果に含まれる「英華言語」「学中国語言」のような単に文字連鎖上言語名に一致しただけのものは気付いた限り除いて集計した。
- 17) 引用は曲直瀬道三(1507～1594)の遺著と目されるものを1831(天保3)年に出版した校訂本による。表現が原文の通りであるという保証はないので、場合によっては1831年の用例と見なす必要がある。
- 18) 引用は伊原青々園編『日本戯曲全集 第一卷 中古江戸狂言集』(春陽堂、1931年)における鈴木白藤旧蔵写本の翻刻による。
- 19) 引用は笹野堅校訂『能狂言(上)』(岩波書店、1942年)の翻刻による。
- 20) 『通航一覽』からの引用は国書刊行会編『通航一覽』第六(国書刊行会、1913年)の翻刻による。

- 21) 中国語の「清語」は、例えば満州語の学習書である博赫編^{Behe}『清語易言』（1766（乾隆31）年）の書名に見られる。同書の本文には「清語」のほかに「清話」という表現も出て来る。語学書以外では、『欽定大清会典事例』卷三百十五（1818（嘉慶23）年）などに「清語」が見出される。
- 22) セイの読みはおそらく中国の王朝名を統一的に漢音で読むべきだとする見解の反映であろう。例えば、多田南嶺『南嶺子』巻之一（1749（寛延2）年）は「明をみん、清をしんとよむ人もあり。是ばかり異音を用べき理なし。」と批判し、メイ、セイの読みの妥当性を主張している。
- 23) 当の閣議決定の内容およびすぐ後に触れる外務次官通達はともに「国立公文書館デジタルアーカイブ」(<https://www.digital.archives.go.jp/>)で公開されている。
- 24) 引用は黒板勝美校訂『類聚国史』（経済雑誌社、1916年）の翻刻による。

[文献]

- 田野村忠温（2008）「日本語研究の観点からのサーチエンジンの比較評価—Yahoo!とGoogleの比較を中心に—」『計量国語学』第26巻第5号
- 田野村忠温（2018a）「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜—附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第58巻
- 田野村忠温（2018b）「言語名『英語』の確立」『東アジア文化交渉研究』第11号（関西大学大学院東アジア文化研究科）
- 中村久四郎（1914）「近世支那の日本文化に及ぼしたる勢力影響（第三回、第四回）」『史学雑誌』第25編第4号、第7号
- 郭浩帆（2000）「《繡像小説》創辦、刊行歴史追溯」『清末小説』第23号
- 郭熙（2004）「論“华语”」『暨南大学华文学院学报』2004年第2期
- 黄鸣奋（2005）「世紀回眸：从华语到世界汉语—《人民日报》（1946-2000）相关用语分析」『海外华文教育』2005年第2期
- 李宇明（2003）「清末文字改革家论语言统一」『语言教学与研究』2003年第2期
- 卢绍昌（1984）『华语论集』（新加坡：金昌印务）
- 田惠剛（1994）「海外华语与现代汉语的异同」『湖北大学学报（哲学社会科学版）』1994年第4期
- 张鸿苓・吴亨淑・张锐・孙炳铨编（1982）『语文教学方法论』（北京师范大学出版社）
- 郑奠（1959）「汉语词汇史随笔」『中國語文』1959年6月号
- 庄妙青（2005）『“华语”一词的历史演变与发展』（马来西亚：南方学院出版社）
- 邹振环（2008）「《外国史略》及其作者问题新探」『中山大学学报（社会科学版）』第48卷第5期

余論 中国語教育界の特殊な言語現象

中日両国で出版された中国語の教科書を確認してみると、文例に中国語の名称として「漢語」を使っているものが非常に多い。しかし、現実の中国語における名称の使用状況(5.2)に照らせば、それは「漢語」の偏重と言わざるを得ない。「漢語」の教育に携わる教師や研究者はその用語に常に接しているがゆえに、専門的な議論の文脈だけでなく、学習者に示す口語表現の文脈においても「漢語」を優先的に使ってしまうのであろう。「漢語」教育である以上、「漢語」の名称を一貫して使わなければならない」という不文律が中国語教育界に形成されているものと見られる。

そのことを象徴的に示しているのは陳学超『漢語会話課本』（西北大学出版社、1993年）で、この教科書は「他説中文，還是説日文？（彼は中国語を話しますか、それとも日本語を話しますか?）」などの文例をいったん印刷したあとで、その「中文」「日文」の上にわざわざ小さな紙片を貼り付けて「漢語」「日語」に「訂正」している（しかし、併記されたピンインは処置されず、‘zhōngwén’、‘rìwén’のままである）。あたかも「中文」は使ってはならない不適切な名称であるかのような扱いである。また、復旦大学国際文化交流学院（王安主編）『学説中国話』（漢語大詞典出版社、1991年）は書名に「漢語」ではなく「中国話」を使った比較的稀な事例で、しかも、本文中の文例に中国語の名称が50回以上も出て来るという点でも例外的であるが、使われている名称は一定して「漢語」で、「中国話」は一度たりとも出て来ない。

外国語としての中国語の教育の歴史が中国よりはるかに長い日本においても現代の状況は中国と同様である。日本で出版された教科書は書名には「中国語」の名称を使うものが圧倒的に多いが、本文ではやはり「漢語」を使っているものが多い。大阪大学附属図書館にある入門書のうち1980年以後のもの数十点が文例にどの名称を使っているかをざっと調べてみると、次の通りであった。

- | | |
|-------------------|-----|
| (a) 「中文」を使用 | 9点 |
| (b) 「漢語」を使用 | 42点 |
| (c) 「中国話」を使用 | 3点 |
| (d) 「中文」と「漢語」を併用 | 4点 |
| (e) 「中文」と「中国話」を併用 | 1点 |

「漢語」を使わない教科書((a)、(c)、(e))も計13点あるが、うち10点は生年代の早い著者による入門書である。具体的な著者名を生年とともに挙げれば、伊地智善継(1919年)、金若静(1930年)、大河内康憲(1932年)、興水優(1935年)、榎本英雄(1936年)、牧田英二(1937年)、上野恵司(1939年)である。その後の世代の著者には「漢語」を使う傾向が顕著である。

学習者が入門段階で学ぶ中国語の名称は当然現実の話しことばでよく使われているものであるべきであろう。新中国において中国語の正式な名称として「普通話」とともに選ばれた「漢語」を初級教科書の文例にそのまま使うのは筆者の考えるところでは異なる言語使用域(レジスター)の混同である。

外国人に対する中国語教育を主題とするおそらく中国初の論文集である『語言教学与研究』第一集(北京語言学院、1977年)は、前言や各論文の本文では「漢語」の名称を使っているが、論文中の文例にはほとんど「中文」を使っている。すなわち、その段階では専門的な論述と学習者に教える会話文という2つの言語使用域で中国語の名称が使い分けられていたことになる。その後文例にも「漢語」を使うことが一般化し、現実の中国語と教科書の中国語の乖離が生じたわけであるが、正式名称、学術用語としての「漢語」の束縛から逃れ、教科書の中国語を再び現実に合わせて努力がなされるべきであろう。

(文学研究科教授)

中国語名称年表

(A) 中国語における名称

	資料名	中国語の名称
656(顕慶1)	隋書32 経籙1※	華語
710(景竜4)	史通6 言語※	華語
8世紀・唐	岑参 与独孤漸道别	漢語
8~9世紀・唐	白居易 縛戎人	漢語
1053・北宋	新五代史 四夷附録契丹	漢語
1060(嘉祐6)	新唐書221上 列伝146上※	華語
1120(宣和2)	宣和画譜12	華語
1584(万曆12)	Ruggieri 天主聖教実録	唐字
1601(万曆29)	Ricci 交友論	華文
1602(万曆30)	Ricci 坤輿万国全図※	漢語
17世紀前半	[Aleni 大西西泰利先生行蹟他	中国語言文字, 中華語音文字]
1666(康熙5)	宋詩鈔7	華語
1766(乾隆31)	博赫編 清語易言	漢語[, 清語, 清話]
1771(乾隆36)	御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑	漢語(序の日付は乾隆36年12月、西曆では1772年1月)
1814(嘉慶19)	Marshman 中国言法	中国言法(中国言+法?)
1815(嘉慶20)	Morrison 通用漢言之法	漢言
1819(嘉慶24)	Medhurst 地理便童略伝	中国文
1822(道光2)	Morrison <i>Eng.-Chi. Dictionary</i>	漢語, 中国的話, Chinese spoken language 華言, Chinese written language 漢文
1823(道光3)	Morrison 英吉利文話之凡例※	漢語*
1824(道光4)	Davis <i>Commercial Vocabulary</i>	漢語, 中国的話, 唐語, 華言
1826(道光6)	<i>Eng. and Chi. Student's Assistant</i>	漢語*
1828(道光8)	Morrison 広東省土話字彙	唐人話, 唐話
1829(道光9)	Gonçalves 漢字文法	中国話*, 漢語*
1831(道光11)	Gonçalves 洋漢合字彙	中国話, 華言, 漢文
1832(道光12)	Medhurst <i>Hok-kêèn Dictionary</i>	唐語[, 梵話]
1836(道光16)?	姚衡 寒秀艸堂筆記※	漢語
1841(道光21)	Bridgman <i>Chrestomathy</i>	唐語*
1843(道光23)	Thom 華英通用雜話 上	漢語*, 漢文
1844(道光24)	Williams 英華韻府歷階	唐話
1846(道光26)	梁廷楠撰 海國四説※	漢語
1847(道光27)	Medhurst <i>Eng.-Chi. Dictionary</i> Morrison 外国史略(このころ完成)	中国話, 華言, Chinese writing 漢文 中国語
1849(道光29)	鄭仁山 華英通語	漢語*
1854(咸豐4)	Hernisz 習漢英合話 Legge 新約全書註釈	中国話* 漢文
1856(咸豐6)	Muirhead訳 大英国志	華文
1859(咸豐9)	Chalmers 英粵字典	唐語
1860(咸豐10)	馮沢夫他 英語註解	中国話*
1861(咸豐11)	Bridgman 大美聯邦志略	華語
1863(同治2)	Summers <i>Handbook of Chinese</i>	中国話*

1864(同治3)	Lobscheid 英華行篋便覽	唐話
1866(同治5)	Lobscheid 英華字典(～1869)	唐話, 中国話, 華言, 漢語, Chinese writing 漢文, 唐文
1867(同治6)	Wade 語言自邇集	漢語*
1868(同治7)	鄭其照 字典集成	中国話
1869(同治8)	Bridgman他訳 新約全書	漢文
1872(同治11)	Doolittle 英華萃林韻府1 申報(～1949)	漢語, 唐話, 中国話, 中国的話, written language 漢文, spoken language 華言 漢語, 華語, 中国語, 中華語, 華言, 中国話, 中文
1876(光緒2)	W. T. Morrison 字語彙解	中国話
1877(光緒3)	紀聞類編2 時政類	華語
1881(光緒7)	花園新報9 日本近事彙記	華語
1882(光緒8)	Condit 英華字典 [Condit 英語入門]	唐話 華語(單語の意)]
1888(光緒14)	Stedman <i>et al.</i> <i>Canton Phrase Book</i>	唐話
1892(光緒18)	Mateer 官話類編 Giles <i>Chi.-Eng. Dictionary</i>	中国話* 漢語, 漢文
1895(光緒21)	黃少瓊 字典彙選集成	唐話
1899(光緒25)?	通學齋叢書 中外章程 日本各學校規則	華語
1902(光緒28)	吳汝綸 重訂東游叢錄※	国語[, 普通語]
1905(光緒31)?	[李宝嘉 文明小史]	中国文, 中文(文章の意)]
1908(光緒34)	顏惠慶 英華大辭典	中国話, 華語, 中国語言
1911(宣統2)	学部中央教育會議 統一國語辦法案	国語
1913(民国2)	商務書館英華新字典 常楫之他編 世界語中国語分類字典	中国語 中国語
1918(民国7)	教育部 国語統一籌備會規程 新青年4-4,5-1,4,5,6	国語 中国話, 中国語, 漢文, 漢語, 国語, 中国国語
1920(民国9)	楊樹達編 中国語法綱要 黃展雲他編 訂正最新国語教科書	中国語, 中国語言 国語
1924(民国13)	黎錦熙編 新著国語文法	漢語, 国語
1927(民国16)	Ratay 適用新中華語 清華學校圖書館中文書籍目錄 浙江圖書館報1	中華語, 華語 中文[, 西文, 日文] 中国語
1935(民国24)	葉籟士 拉丁化概論 中文拉丁化研究会 中国話写法拉丁化	中文, 中国話, 国語 中文, 中国話, 国語
1937(民国26)	Karlgren著 張世祿訳 漢語詞類	漢語, 中国語
1938(民国27)	吳体仁編著 南洋各属之教育制度	漢文, 華文, 中文
1939(民国28)	王力 中国語文概論	中国語, 中国語言
1948	高名凱 漢語語法論	漢語, 中国語
1955	王力 漢語講話	漢語
1956	国务院 關於推广普通話的指示 教育部 初級中學漢語教学大綱(草案) 中国科学院 關於編設詞典編輯室的報告	漢語[, 普通話] 漢語[, 普通話] 現代漢語規範, 現代漢語詞典[, 普通話]
1957	中国大辭典編纂处編 漢語詞典 簡本	漢語, 国語

1958	第一屆全人代會 漢語拼音方案	漢語拼音[, 普通話]
1962(民國51)	中文大辭典編纂委員會編 中文大辭典I	中文
1965	中國科學院 現代漢語詞典(試印本)	漢語, 現代漢語[, 普通話]
1977	語言教學與研究1	漢語, 漢語教學, 漢語作為外語教學[, 普通話]
1982	語言教學與研究1982-3	漢語, 對外漢語教學, 對外漢語教學研究會[, 普通話]

(B) 日本語における名称

	資料名	中国語の名称
8世紀	[続日本紀10 天平2年3月※]	漢語(漢文中の使用)
892(寛平4)	[菅原道真編 類聚国史199]	中国語(漢文中の使用)
16世紀	曲直瀬道三 雖知苦庵養生物語	カラコトバ*
1604(慶長9)	ロドリゲス 日葡辞書	Caracotoba(唐言葉), Caragon(唐言)
1646(正保3)	国田兵右衛門他口述 韃靼漂流記	北京にての詞(ことば), 北京の詞, 北京詞(韃靼語との対比)
1671(寛文11)	咄本 私可多話※	唐音*
1711(宝永8)	荻生徂徠 訳文箋蹄初編	漢語(単語の意?), 華語[, 中華語(漢文中の使用)]
1714(正徳4)	新井白石 白石先生琉人問対	唐言葉
1716(享保1)	岡島冠山 唐話纂要	唐話
1728(享保13)	太宰春台撰 倭語要領	華語[, 華音]
1730(享保15)	絵入狂言記拾遺1 唐人相撲	唐言葉
1750(寛延3)?	雜俳 松の雨※	唐音*
1762(宝暦12)	通航一覽229 陸奥漂流口書き	唐音
1764(明和1)	田辺茂啓 長崎実録大成8	唐韻
1773(安永2)?	建部綾足 本朝水滸伝後編46	漢語(からこと)
1783(天明3)	江村北海 授業編3※	唐話
1785(天明5)	瀬川如卓・宝田寿来 千代始音頭瀬渡 唐来参和 和唐珍解※	唐言葉(からことば)* 唐音(とういん)*
1792(寛政4)	大蔵虎寛本狂言台本	唐言葉, 唐ことば, 唐音
1797(寛政9)	通航一覽236 松前漂流口書き	唐音
18世紀	伊勢貞丈 武器考証2	唐詞
1810(文化7)	奥平昌高 蘭語訳撰	漢語(単語の意?)
1833(天保4)	鶴峰戊申 語学新書	漢語(単語の意?)
1847(弘化4)	磯野信春 長崎土産※	華音(タウイン)
1850(嘉永3)?	黒田麴蔵訳 漂流紀事※	支那語
1860(万延1)	Liggins <i>Phrases in Eng. and Jap.</i>	Kara no kotoba*
1872(明治5)	松岡章編輯 和英通語	カラノ言(コトバ)*, 支那ノ言(コトバ)*
1873(明治6)	Liggins <i>Conversations in Eng. and Jap.</i> 太田随軒 会話篇1	Kara no kotoba* 支那語*
1875(明治8)	[文部省年報1]	清語学(清+語学?)
1876(明治9)	[文部省年報2]	清語学, 漢語学]
1877(明治10)	Crawford他著 大槻文彦解 支那文典	漢文
1879(明治12)	東京学士会院雑誌1-4 津田仙他訳 英華和訳字典	漢語 カラノコトバ
1880(明治13)	興亜会支那語学校編 新校語言自選集 朝日新聞7/4	支那語 清語(せいご)
1882(明治15)	柴田昌吉他 増補訂正英和字彙	支那語
1884(明治17)	矢田堀鴻訳 英華學術辞書	支那語

1885(明治18)	市川義夫 英和和英字彙大全	漢語
1888(明治21)	ウェブスター氏新刊大辞書と訳字彙 鄭永邦 日漢英語言合璧	支那語 漢語
1891(明治24)	寺師宗徳編 条約改正之標準	清語
1892(明治25)	亜細亜37	清国語, 清語, 支那語
1894(明治27)	松本仁吉 日清韓三国対照会話篇	清語
1895(明治28)	川辺紫石 日英対照支那語学速修案内 円山真逸編 漢語問答篇	清語, 支那語 漢語
1896(明治29)	東邦協会々報24 朝日新聞4/9	支那言葉, 漢語 清国語(しんこくご)
1899(明治32)	[牧相愛 燕語啓蒙]	清国ノ言語, 北京語, 燕語]
1900(明治33)	岡沢鉦次郎 初等日本文典前編上 宮島大八 支那語独習書 西島良爾 清語会話案内上 言語学雑誌1-1	支那語, 漢語 支那語 清語, 支那語 清国語
1901(明治34)	石川倉次 はなしことばのきそく 東亜同文会 華語跬歩	からことば 華語
1902(明治35)	広部精編 増訂亜細亜言語集	支那語, 漢語, 漢語[, 唐語(漢文中の使用)]
1903(明治36)	上田万年 国語のため第二※	中国語
1904(明治37)	日清研究会編 清国語速成 満洲語会話一ヶ月卒業	清国語, 支那語 満洲語
1905(明治38)	信原継雄 清語文典 金島苔水 日清会話語言類集	清語, 支那語 清語(シンゴ)
1907(明治40)	松村任三 植物雑話	支那詞[, 日本詞]
1909(明治42)	松平円次郎 俗語辞海	支那語(シナことば), 支那語(シナゴ), 中国語(チウゴクゴ), 唐語(タウワ), 華言(クワゲン), 華語(クワゴ), 華話(クワワ)
1911(明治44)	森槐南 作詩法講話	支那言葉
1912(大正1)	地学雑誌24	支那言葉
1916(大正5)	山脇和泉 和泉流狂言大成1 唐人相撲	唐音, 唐イン
1926(大正15)	宮越健太郎編 華語発音提要 長崎市役所編 長崎と海外文化	華語 中華語
1931(昭和6)	佐々木盛一 日語華訳教科書 上 満蒙12-7	華語, 中国語, 支那語 中国語
1935(昭和10)	吉野美弥雄 満洲語基礎	満洲語, 支那語
1940(昭和15)	新満洲4-4,5,6 日本放送協会編 ラヂオ年鑑 陳文彬・香坂順一 中国語教本 構文篇	満洲語, 満語, 支那語 支那語, 満洲語, 満語, 華語 中国語
1947(昭和22)	中国語学研究会 中国語学1	中国語

凡例・注

- この年表は主に20世紀中葉までの中国語における中国語の名称の出現状況を示す。併せて、関連語の用例を〔〕に入れて示す。
- 言語名のうち現代の中国語で広く使われているもの——中国語での名称については「中文」「漢語」「中国話」「華語」「国語」、日本語での名称については「中国語」——をゴシック体で示す。
- 言語名が口頭表現の文脈で用いられたものには「*」を付して示す。
- 文献名は記入スペースの制約上必要に応じて調整して示す。
- 文献名の後ろに付した「※」はその文献における用例が過去の研究ですでに指摘されていることを示す。
- 用例は基本的に現物ないしその影印によって確認したが、それができない少数のものは翻刻テキストによった。

SUMMARY

Aspects of Chinese and Japanese Names for the Chinese Language:
Their Variety, Diachronic Selection and Functional Shift

Tadaharu TANOMURA

There are several ways in which the Chinese language may refer to itself. The most common names will include *Zhongwen* (中文), *Hanyu* (漢語), *Zhongguohua* (中国話), *Huayu* (華語) and *Guoyu* (國語), the last two of which are known to be employed mainly in East-Southern Asian countries and Taiwan, respectively.

To the knowledge of the present author, there has been no systematic description of the history of the relevant names. Nor have there been overall analyses of differences in the usage of the competing names, presumably because they have generally been regarded as mere proper names without semantic content.

This article will show first that there were a much larger number of names for Chinese in the past, and that those names which are used today are a result of diachronic selection and have undergone functional shift. It will also be demonstrated that each name has its own collocational preferences, which also have changed over time.

At the final part of the article, the history of Japanese names for Chinese will be examined.